

### 香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 若林教裕先生より

日頃はSSWerの皆様には、学校のためにご尽力頂きありがとうございます。

SSW等月例研修会において、課題として「学校との連携」や「SSWerの認知度」の2点が上がったことを受け、県内指導主事が集まる会で、以下の内容を情報提供しましたのでお知らせします。

SSWerは『福祉の専門家』で、子どもを取り巻く環境に働きかけ、学校と支援ネットワークを『つなぐ』のが仕事です。具体的には「学校内の職員間をつなぐ」、「子どもと子どもをつなぐ」、「子どもと保護者をつなぐ」、「家庭と福祉機関をつなぐ」、「学校と関係機関（福祉、行政、医療、地域、他校）をつなぐ」等の仕事をしています。全国のSSWerの対応実績も、平成24年では6500件だったのに対し、令和元年の時点では17800件と約2.7倍に増加し、ますますニーズが高まっています。

本県においても、コロナ禍で、気になる児童生徒を家庭訪問し、教職員と情報共有のケース会議を開いたり、保護者の要望に応じて、不登校傾向の児童生徒を誘い、空き教室で担任や養護教諭とグループワークを行い、登校できるきっかけをつくったり、発達障害に関わる校内研修を実施したりしました。

しかし、SSWerに対する認知度が低いと、学校からSSWerは信用を得られないので、学校は情報を絞ってしまい、SSWerは十分に力を発揮できません。また、初動が肝心なのですが、事案が大きくなってから情報が入る場合が多いのが実情です。SSWerにとっては、学校からの「信用と情報」が命なので、ぜひ、そのサポートをお願いします。

学校や市町との連携の工夫については、例えば、ある市町では指導主事とSSWerがタッグを組んでケース会を企画運営し、それぞれの立場でできることを共有しています。また、ある学校ではSSWerの勤務時間に合わせて生徒指導部会を開いたり、仕事の内容を学校便りで紹介したり、学年集会等で話をしたりしています。さらに、SSWerの勤務日に放送を活用し、相談希望を募っている学校もあります。

多くのSSWerは「エコマップ」と言って問題を関係図に整理する技術をもっています。エコマップを使うと短時間で多くの人が情報を共有することができます。また、教員とは異なる視点があり、膠着した問題の突破口になることも期待できます。ぜひ、『チーム学校』の体制強化のため、学校側の情報の窓口を育てて頂くとともにSSWerのバックアップ体制を整えていただきますようお願いいたします。

### オンライン研修 2020年10月10日 事例検討「不登校」

宇多津町の松本遥夏さんより事例提供していただき、不登校の子どもや家庭に対して、どのように支援を行っていくかをみなさんで検討していただきました。オンラインでの事例検討は、どうなるのだろう？と不安な気持ちもありましたが、いつものように子どもを中心とした意見交換が活発にできました。

検討事項が「家庭訪問以外にどのようなアプローチがあるのか？」だったこともあり、参加者のみなさんが日々活用している子どもとつながる方法やきっかけ作り等の意見がたくさん出ました。今回の事例検討ではスクールソーシャルワーカーとしてお互いの活動を知る機会にもなりました。手紙や、家庭訪問の仕方、子どものストレンクス、そのストレンクスをどう支援につなげるか等、細かな支援をみなさんで検討しました。もちろんSSWerの活動には欠かせない「かかわり」「子どもの意思」「つながりをもつ」「子どもの思いを大切にする」の大事なワードもたくさん出ました。事例検討は、毎回、頭をフル回転させて考えます。自分の日頃のかかわりがこれでよかったのか？と振り返ったり、同じようなケースと当てはめたり、私もこのアプローチ方法をつかってみようと前向きに考える時間になります。そして、みなさんの子どものために一生懸命に考える姿からSSWerとして私も頑張ろう！と思わせてもらっています。

まだ事例検討に参加したことのない人には是非参加してもらって、この活気を知ってもらいたいです。

(普通寺市SSWer 清水 美沙さん)

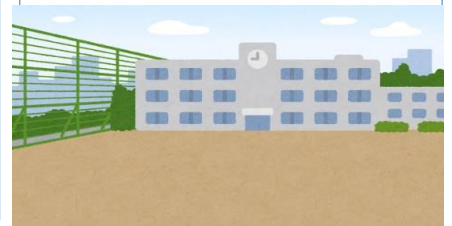
### SSWの視点

スクールソーシャルワーカーが子どもや家族とかわる時、**ストレンクス(強み)**に注目します！

例えば

- 人と話をするのが好き
- 挨拶ができる
- 学校には連絡をマメにする
- 学校行事には参加する

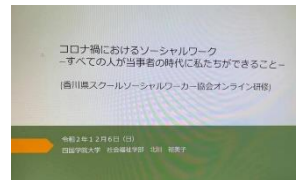
必ずストレンクス(強み)を持っています。その人の問題ではなく、可能性に目を向ける視点を大切にしていきます。



四国学院大学社会福祉学部助教授 北川 裕美子先生より御講義していただきました。

少年院でのソーシャルワーク実践を交えた講義には、同じソーシャルワーカーであっても知らないことが多く、たくさん学びがありました。親子関係の再構築とは、修復を目指すわけではなく、子どもが肯定的に自分の生き立ちを捉えられるようになること、「生まれてきてよかった」「自分は大事な存在」との気持ちが抱けるようになること、とのお話がありました。決して「一緒に暮らすことがすべてではない」という言葉も印象的です。

また、「子どもが過ごしやすい環境でいられるために」「その子が自分らしくいられるために」ソーシャルワーカーがかかわる、といったお話もありました。スクールソーシャルワーカーとしても、大切にすべき視点ではないかと思えます。目の前の相手が教職員や保護者であっても、それが子どもに通ずる支援であるかを考え、伴走者としてかかわっていくことの大切さを改めて考えさせられました。(善通寺市SSWer 石川 茉生子さん)



「連携ってむずかしい!?～高松市の小中学校での連携の実際から考える連携」  
として高松市の波多江さんと「幼稚園でのスクールソーシャルワーク」として  
善通寺市の石川さんに報告して頂きました。



研修の依頼があり、自分がどんなことを伝えることができるかを考えました。

はじめは連携がうまくできた事例をだそうと思っていました。

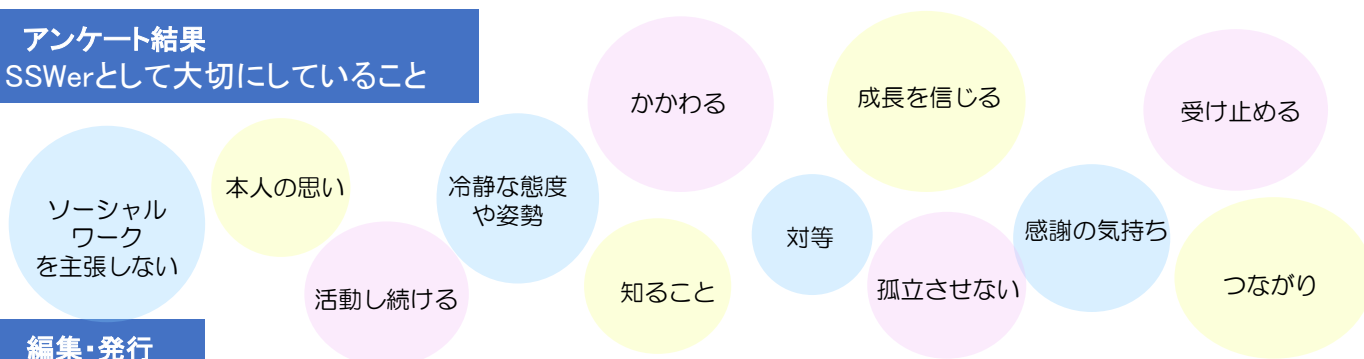
どの事例をだそうかな…とこれまで関わってきた事例を思い出していききました。その中で、自分がSSWerとしてはじめから連携がうまくできていたわけではないことを思い出しました。SSWerになりたてのとき、学校組織について、関係機関について何もわからない状態だったこと、ワーカーは連携するものだと焦って空回りしていたこと、連携ということばにとられすぎてケースのアセスメントがきちんとできていなかったことなど、たくさんうまくいかなかったことがありました。

そんななかで、協会の研修や同じ市のSSWerからいろいろなことを教えてもらいながらケースに取り組んでいきました。ケースを積み重ねていくなかで、教員との関係や外部機関の担当者との関係がすこずつ構築されていきました。

もちろん今も全部がうまく連携できているわけではありませんが、ひとつひとつ丁寧にケースに関わっていくことで自然と連携していくことができるようになります。なぜなら連携は人とのつながりです。まず自分の周りのSSWerとのつながり、職場でのつながりから大事にしてみてください。きっと連携は少しずつ広がっていくと思います。

今回自分のこれまでの取り組みを振り返る機会をいただき、ありがとうございました。研修に参加いただいた皆様も貴重なお時間を頂きまして本当にありがとうございました。(高松市SSWer 波多江 愛さん)

### アンケート結果 SSWerとして大切にしていること



### 編集・発行

今年度は、新型コロナウイルスや緊急事態宣言を受けて休校となり、学校と相談しながらSSWerとしてできる支援をそれぞれが考えた年になったのではないのでしょうか？その中で、ニュースレターや実践報告集など、ご協力いただきありがとうございました。来年度も編集広報委員の活動にご理解、ご協力いただきますよう、よろしくお願いたします。

香川スクールソーシャルワーカー協会 編集広報委員 清水 川添 高田 波多江 福島  
事務局：四国学院大学西谷研究室内 香川県善通寺市文京町3-2-1 ☒ kagawa.k.ssw@gmail.com